

「ぶらりと両手を垂げたまま、圭さんがどこから帰って来る。」「どこへ行ったね」「ちょっと、町を歩いて来た」「何か観るものがあるかい」「寺が一軒あった」「それから」「銀杏の樹が一本、門前にあった」「それから」「銀杏の樹から本堂まで、一丁半ばかり、石が敷き詰めてあった。非常に細長い寺だった」「這入って見たかい」「やめて来た」「そのほかに何も無いかね」「別段何もない。いったい、寺

二百十日

①

夏目漱石著

絵・有田 巧



と云うものは大概の村にはあるね、君」「そうさ、人間の死ぬ所には必ずあるはずじゃないか」「なるほどそうだね」と圭さん、首を捻る。圭さんは時々妙な事に感心する。しばらくして、捻



漱石記念年
2016・2017

ねった首を真直にして、圭さんがこう云った。「それから鍛冶屋の前で、馬の脊を替えるところを見て来たが実に巧みなものだね」「どうも寺だけにしては、ちと、時間が長過ぎると思った。馬の脊がそんなに珍しいかい」「珍らしくなくとも、見たのさ。君、あれに使う道具が幾通りあると思う」「幾通りあるかな」「あてて見たまえ」「あてなくとも好いから教えるさ」

「何でも七つばかりある」「そんなにあるかい。何と何だい」「何と何だって、たしかにあるんだよ。第一爪をはがす鑿と、鑿を敲く槌と、それから爪を削る小刀と、爪を削る妙なものと、それから……」「それから何があるかい」「それから変なものが、まだいろいろあるんだよ。第一馬のおとなしいには驚ろいた。あんなに、削られても、刳られても平気でいるぜ」「爪だもの。人間だって、平気で爪を剪るじゃないか」「人間はそうだが馬だぜ、君」「馬だって、人間だって爪に変わりはないやね。君はよっぽど呑気だよ」